



K.C. News

京都知福協だより

京都知的障害者福祉施設協議会
京都市上京区猪熊通丸太町下ル中之町519 京都社会福祉会館202 <http://kyotifuku.jp> 発行人 樋口幸雄

- ◆ 地域と共に生きる 1
- ◆ 「京都知福協専門研修会」を終えて 2
- ◆ 「京都知福協相談支援部会および日中活動支援部会研修会」を終えて 3
- ◆ ちょっとお・し・え・て 3
- ◆ 第40回京都知福協「幼児のつどい」を終えて 4
- ◆ 京都知福協風船バレーボール大会をふりかえって 5
- ◆ シリーズがんばっています 6
- ◆ シリーズこんにちは 7
- ◆ 新規加入施設紹介 8



「みんなでハロウィンのお化けを作りました」
あしたー工房 利用者作品▶



地域と共に生きる

京都知的障害者福祉施設協議会 会長 樋口幸雄



平成28日7月26日未明、神奈川県相模原市にある障害者支援施設「津久井やまゆり園」で起きた大変痛ましい事件。卑劣かつ残忍極まる犯行を断じて許すわけにはいきません。改めて、犠牲になられ命を奪われた方々のご冥福と負傷された皆様方の一日も早いご回復を心からお祈り申し上げます。特に、加害者が元職員であったこと、安全であるべき施設事業所内において、こうした凶行を防げなかったことは、障害者支援を担う事業者・従事者として心からお詫び申し上げなければなりません。また、事件に遭遇された皆様の深い心の傷は計り知れず、私たち関係者はその重荷の一端でも担えるよう行動していかねればならないと思います。加害者が犯行動機とする障害者観や弱者排除の考えは、インクルーシブ社会にほど遠い現実を示すものであり、私たちの力不足と果たさなければならぬ役割・使命を痛感します。今回の事件、その再発防止に向けた防犯等、安全対策の強化は喫緊の課題ではありますが、より重要なことは地域と共にある福祉・開かれた事業運営という理念を一步も後退させてはならないこと、地域の福祉ニーズを充足し、地域社会の力を高めていくことに積極的に貢献していくことにあります。このことが、障がいのある人もない人も誰もが安心して暮らせる社会の礎となります。

今回の事件が本質的な議論を通して深く検証され、よりよい施設のあり方が見出されることを強く望みます。私たち施設事業者・従事者は、日々の支援の質を高め、利用者主体の支援とは何かを問い続けていきたいと思います。

1. 平成29年度京都府・京都市予算要望重点項目
障害者虐待防止に向けた施策の推進
共催で取り組む虐待防止セミナーの開催。虐待認定をされた事案についての詳細の公表。
2. 大規模災害対策について
施設における事業継続計画（BCP）、一時避難所でのスクリーニングと対象者移送の課題、医療的ケアが必要な方の受け入れ、避難できずに自宅に取り残された方の安否確認。
3. 障害者地域生活拠点の実施について
京都市「障害者24時間相談支援体制構築モデル事業」の評価。地域のセーフティ機能としての拠点整備の必要性。
4. 報酬改定に関する影響について
食事提供加算や補足給付費の単価の改善。相談事業について、専任で相談支援専門員を配置できる補助金制度の創設。
5. グループホームの設置運営に対する支援策について
京都府福祉のまちづくり条例、京都市バリアフリー条例、建築基準法、消防法の規定の柔軟な運用。
6. 児童分野の課題に対する対応
施設・事業者と行政や圏域毎の支援センターで構成する協議の場の設置。
7. 福祉人材確保と人材育成について
人材確保のための高校・大学等との連携事業の創設。福祉介護職員の人材育成、定着を図るための研修事業の充実。
8. 強度行動障害への対応
「超強度行動障害」の状態にある人の実態調査の実施。行動障がいの改善を目的とした、有期限の小規模訓練施設創設。
9. 利用者の高齢化について
施設の小規模化・バリアフリー化・研修の充実。

「京都知福協専門研修会」を終えて

研修委員会委員長

社会福祉法人山城福祉会 宇治川福祉の園

施設長 菊池 ゆかり

9月17日(土)に「自閉症療育を通して成人期の発達をみつめる」というテーマで、京都知的障害者福祉施設協議会の専門研修会を京都社会福祉会館にて開催いたしました。講師に長年障がい児療育に取り組み、成人施設でもご指導されているトモニ療育センター(愛媛県)の河島淳子先生と高橋知恵子先生をお招きして、成人期の自閉症支援の在り方を学びました。

河島先生は、小児科医であり自閉症の子どもを持つ母親として、できるだけだけの自立を目指してテーマをもち、一貫して継続した家庭療育を続けてこられました。



た。具体的には、①基礎

学習と時計・金銭など生きる力となる学習に取り組む、②料理に取り組む、③手の機能を磨き、作品作りをする、④早朝マラソン、早朝ウォーキングに取り組む、⑤山歩き・水泳・ラジオ体操ができるようにする、⑥排泄を始め基本的生活習慣の確立をする、というものでした。その後、ト

モニ療育センターを立ち上げられ、ご自身の実践を通して確立された自閉症療育をご指導されています。講義の中で、自閉症の正しい理解に基づく行き届いた支援の下では「誰でも30代、40代からでも成長できる事」、そして「できることが増え、支援者との深い信頼関係が築けてくると豊かな心が育ち、結果として行動障害が解消されていく」、「基礎学習はまず数字100並べから」というお話は、参加した多くの成人施設の職員にとって、明日からの支援の参考になるものでありました。

高橋先生には、実際の課題学習の指導方法や子どもの変化、観察の視点などをDVDや教材を使って説明していただきました。成人施設での基礎学習100並べの取り組み状況を見て、利用者の様子や表情には明らかな変化と成長が見てとれました。さらに実際の教材が展示されていきましたので、見て触れて説明を聞くことでより理解を深めることができました。

河島淳子先生の講演



午後からは、京都の実践報告が3名の方からありました。まず、山城南発達支援センターセンター長の飯田周子氏より「行動障害をどのように理解し、どのように向き合うか」というテーマで、トモニ療育センターでの研修を受けられた後、激しい行動障害のある方への個別療育をされた報告でした。その中で、『一

人ひとりを丁寧に観察し、その人を詳しく把握して、具体的に取り組みを進めながら心を育てていくこと。』『継続は力なり、諦めない限り可能性がある』という言葉に重みを感じました。

次にあんずデイセンター常本将平氏より、「重度知的障害のある自閉症者のギヤッベ作業」の報告をいただきました。

ギヤッベとは、イランの遊牧民に伝わる伝統的な手織り絨毯のことです。図案の色と同じ色の糸を一本一本選んで置いていき、順番にその糸を縦糸に結んで絨毯に仕上げていくという時間と根気のいる作業です。図案の読み取りについては、河島先生の指導されている課題学習の要素が反映されているとのことでした。重度の知的障がいのある自閉症の方

の世界が広がることを願って、緻密な作業を通じ、福祉領域における教育的なアプローチの実践報告でした。

最後は、京都市ふしみ学園施設長の寺本眞澄氏より、「たまたまアート！さりとてアート！主観を表現することから得られたもの」と題してアトリエやっほう!!誕生の経過と活動の報告でした。従来から活動の内容を広げてきた経過はあるものの、好きな活動がない、制御されてイライラするという方々に、自由な作品作りを取り入れたことから、アトリエやっほう!!が始まったこと。その活動を通してコミュニケーション手段が確保され、心の安定が得られ、主体的に取り組みはじめるようになったこと。そして作品が評価されることで自信や喜びにつながり自己実現につながったという内容が、作品の写真や制作過程のご本人の表情などを見ても感じられるものでした。

専門研修の参加者は130名にも上り、重度・強度行動障害のある人たちへの支援はどのようにあるべきかということへの関心の高さが窺えました。たくさんの内容を詰め込んだ研修会となりましたが、講師の皆さまならびに当日運営にご協力いただきました皆さまに心より感謝申し上げます。



参加者からの質問に応じられる高橋先生

「京都知福協相談支援部会および日中活動支援部会研修会」を終えて

相談支援部会部長

社会福祉法人いづみ福祉会

相談支援センターいづみ

施設長 須 河 浩 一

10月23日、京都社会福祉会館において、相談支援部会と日中活動支援部会の共催で「サービス等利用計画と個別支援計画作成の専門性」とつながりを考える」というテーマで、研修会を持ちました。

この研修会の目的は三つありました。

①：サービス管理責任者研修の現任研修は実施されておらず、それぞれの現場の工夫や独自に研鑽を深めざるを得ません。「ほかのサビ管はどんな計画を立てているのか」「自分の計画でいいのだろうか」という疑問・不安への対応として、サビ管等の方々に集まっていた

だけ、情報交換をすることで、少しでも解消していこうとするものです。

②：成人の場合、新規に事業を利用される方以外は、各事業所における個別支援計画の方に歴史があり情報量も多いのが現状です。そのようななかで「サービス等利用計画」の意味を深めていくために、相談支援専門員に必要な視点や専門性、知識とは何かを一緒に考えようとするものです。

③：本来、サービス等利用計画と個別支援計画は相互に補完しあう関係が望ましいはずですが、まだまだその両者の関係は十分に連動したものになっていません。この現状に対して、サービス管理責任者と相談支援専門員等が、同じ事例を基に一緒にそれぞれの計画を

立て、相互の説明しあう機会を持つことで、その関係性や構造について認識を深めようとするものです。

(研修会開催要項より抜粋)

午前中には華頂短期大学教授の武田康晴先生に「サービス等利用計画と個別支援計画の関係性と作成の視点」ソーシャルワークを実践するために」というタイトルで講義をいただきました。

先生は京都府のサービス管理責任者(以下「サビ管」という)や相談支援専門員研修の取りまとめをされており、それらの研修における最新の内容と、私たちが押さえないといけない基本的な視点を、高い専門性と非常にわかりやすい語り口で話をしていただきました。

午後からは参加者による演習を行いました。40歳代のダウン症の女性の事例について、個別支援計画とサービス等利用計画をサビ管と相談支援専門員がグループワークで作成し、それを説明しあうという形式で研修を進めました。「お互いの視点や必要性が再確認できた」「他の事業所の方と意見交換をしながら計画を立てられたので勉強になった」というご意見を多数いただきました。

研修全体を振り返って感じたことは、ソーシャルワークの原点は「チームアプローチ」であるということです。そのためには、ご本人の日常生活の状況・障害や性格などの個人因子や生育歴、暮らししている環境などの情報(生活の全体像)を多方面から総合的に把握すること、ご本人・家族のリアルなニーズの全体像

を把握し、それを支援チーム全体で共有することが重要です。

ここにこそ、サビ管と相談支援専門員が別々の人【顔】で存在することの意味があると思います。本人の生活の一部分で見せる姿が「本当」の姿であるとも限りません。ご利用者はちよつとしたことで、まったく違う姿や力を見せるものです。その意味では、生活や活動の様々な場面の情報が集まる相談支援事業所の情報も不可欠であるといえます。【もちろん、長い付き合いのある通所施設での情報は非常に重要なものです】

また、ご本人・家族が表現するニーズもそれを伝える人によつて変わる可能性があります。関係が濃いからこそ言えること、年に2〜3回会う人だから言いやすいことなど、人間の本音はいろんなところで変わる事もあります。【その逆もまたあると思います】

「安定した関係」は反面「固定化した関係・思い込みに縛られた関係」にもなりかねません。

そのようなことを考えながら研修会を終えたのですが、今回の反省点を生かしながら、今後さらに有意義な研修会を開催していきたいと思えます。最後にご参加いただいた皆様、ファシリテーターなどご協力いただいたスタッフの方々にお礼を申し上げます。ありがとうございました。

ちよつと おしえて

“スヌーズレン”とは:

スヌーズレンとは、オランダで生まれた活動やその理念であり、誘導や指示を行わず誰でも自由にくつろげる空間のことを言います。光、音、におい、触った感覚などの感覚に働きかけ、誰でも自由に楽しむことができます。又、スヌーズレンは障がいのある方だけでなく、支援者、介助者、ご家族にとっても心地良いものとなります。障がいにより会話やコミュニケーションが難しくても、そこにいる人が同じ感覚を味わうことで、お互いに理解し共感できると考えられています。

このように、スヌーズレンは対象者を限定しておらず、病院、幼稚園、コミュニティーセンターなどにも設置され、広がりをみせています。日本ではまだまだ認知度が低いようですが、これからスヌーズレンの理念や考え方が浸透し、誰もが相手のありのままを受け入れ、共感し合える温かい社会が実現することを願います。(上原)

参考：日本スヌーズレン協会 HP
協力・写真提供：京都ライフサポート協会





第40回京都知福協 「幼児のつどい」を終えて

幼児のつどい実行委員会 / 社会福祉法人平野福祉会 多くの皆様 貴園 園長 記子

▼「海」のコーナー



9月30日、島津アリーナ京都（京都府立体育館）に於いて、京都市内にある児童発達支援センターの内、4つの単独通園施設に通う子どもたち、保護者、職員が一堂に会し、親子通園施設のパッポから7名、きらきら園から3名の子どもたちを迎え、計400名近くで「幼児のつどい」が開催されました。開会式では園名をよびかけると各園から大きなお返事が返ってきて幼児のつどいが始まりました。次にケラケラジャンケン曲に合わせて体操をしました。見本を示す先生のカラフルな衣装がすてきで子どもたちだけでなく保護者もノリノリで動く様子が見られました。次は、みんなが知っている歌♪「せんのろはつづくよ どこまでも」の歌詞から取り出した駅と電車を作って遊びました。駅は山谷、街、海としました。駅と駅を結ぶ電車をそれぞれの園で担当し、体育館は山あり、海ありの街ができました。各園の施設長にはそれぞれの駅をイメージした衣装をして電車に乗り込み、各駅の説明や、各コーナーの遊び方をアピールしながら、みんなの周りを一回りしてもらいました。それぞれに趣向を凝らした遊びコーナーを子どもたちが自由に行き交い遊びました。

洛西愛育園は「山谷」の

コーナー。クラ

イミングウオー

ルからの跳び下りに

段々山の斜面、マッ

トで作った凸凹道や

トンネル。子どもた

ちは手足を思い切り動か
かしよじ登ったり、跳
び下りたりと元氣よく遊
ぶ姿が多く見られました。

ひなどり学園は「海」のコーナー。カラフルなカナリアンテープのプールの海に、かわいいお魚がいっぱいいます。プールに入ったり、お魚をつかんだり、集めたり、子どもたちは楽しんでいました。海と線路をつなぐのはトンネル。中には線路に出るのも忘れてトンネルで遊ぶ子どももいました。

空の鳥幼児園は「街」のコーナー。建物に見立てた色々な大きさ、色の箱がいっぱい。積みあげたり、並べたり、時には倒したり。集中して遊ぶ姿、変化を楽しむ姿が多く見られました。むくの木園は「電車」のコーナー。

体育館中央にある線路にはトンネルあり、遮断機あり。さらに渋滞しないよう複線になっている部分もあって駅を通過して電車に乗り続けたり、違う色の電車に乗り換えたりと、様々な電車の楽しみ方が見られました。各駅が楽しくてなかなか電車で遊ばない子どもいれば電車ばかりで駅にこない子どもいる等それぞれ楽しい箇所を見つけて遊んでくれていました。

その後は、「パラバルーン」。みんなの好きな曲で構成されたパラバルーン。大きくてカラフルなバルーンをダイナミックな動きやゆったりとした演技を楽しみました。パラバルーンの中に入り込んでしまおうとちよびり不安そうな表情になる子どもいれはうきうき、わくわく顔の子もいたり様々でしたが、パラバルーンを見て、感じて楽しむ事ができました。

午後からは、「京都市消防音楽隊」の皆様が今年も演奏をお願いしました。体操の曲では隊員さんのすてきな踊り



▲京都市消防音楽隊の演奏

も見られ一緒に動いて楽しむだけでなく見ても楽しめました。馴染みのある曲をたくさん演奏して下さり、隊員の方と一緒にリズムに乗って踊ったり、親子でほっこりと楽しんだり、生演奏の素敵な音色に包まれたひと時を過ごしました。また、隊員の方は、火事や地震が起こった時にはどうすれば良いのか等、寸劇も交えて子どもたちにも分かりやすくお話しをして下さいました。合図に合わせて動作をしたり、声を出したり演奏以外でも楽しめる時間となりました。この日のために、素晴らしい演奏会を用意して下さいました皆様に心から感謝しています。

実行委員会では、それぞれの子どもたちが楽しめるような工夫や、待ち時間をどうすれば短くできるのか、また、子どもたちだけでなく、親子で楽しめる時間となるよう、何度も話し合いをしました。各園の職員のアイデアが詰まったプログラムになったのではと思います。

今年度の「幼児のつどい」も、施設の枠を超えた良き交流の場を持つことの大切さを深く感じ、多くのことを学ぶ機会になりました。

運営、開催にあたり、行事・文化部の濱田部会長をはじめ、お手伝い下さった行事部の方々、たくさんの先生方にご協力を頂き、また、お忙しい中、京都府・京都市からも臨席頂き有難うございました。今後、子どもたち・保護者の方々に、参加して良かったと思ってもらえるように「幼児のつどい」を、みんなで協力し合い、作り上げていきたいと思います。

京都知福協 風船バレーボール大会をふりかえって

行事・文化部会 部会長 / みずなぎ学園 施設長 濱田 康寛



11月9日、今年も恒例の風船バレーボール大会を亀岡運動公園大体育館にて開催いたしました。季節は晩秋を迎え日ごと寒さを感じるとはいえ、この秋一番の冷え込みのなかでの大会開催となりました。

今年は13施設16チームのエントリーをいただき、4チームずつ4ブロックに分かれ対戦してもらいました。各ブロックとも、この日の寒さを吹き飛ばすような熱戦が繰り広げられ、各ブロック1位チームによる決勝トーナメントが終了したのは午後4時半になりました。午後1時半のゲーム開始から3時間が経過しておりまので、選手の皆さんの中には「ちょっと疲れたかな」という表情も見られましたが、精一杯動き回り大きな声を出して頑張った満足感に満ちた笑顔のほうは何倍も上回っているように感じられました。

そして、熱戦を制し優勝を飾ったのは『あけぼの学園るりけい寮Aチーム』、惜しくも準優勝は『美山育成苑チーム』、第3位に健闘されたのは『城陽作業所チーム』でした。こうして、今年度の風船バレーボール大会は無事盛会に終了することができました。これもひとえに、大会に参加下さった160名の選手の皆さんと、明るく楽しく引率いただいた職員の方、運営に協力いただいた11名の実行委員の皆さんのおかげです。

さて、今回の大会で特筆すべき出来事が二つありました。一つ目は、参加施設が北は京丹後市、南は城陽市と南北に長い京都府の北から南まで広がったこと、さらに

京都市内の施設から参加があったことです。近年、参加施設が亀岡以北に偏っていたので、京都市内からは本当に久しぶりの嬉しい参加でありました。

二つ目は、近年の大会において上位入賞の常連施設が入賞を逃したことです。これは、大会の実行委員長を務める立場からすると「ほっとした」出来事でありました。自分の所属する法人施設が上位独占という年もあったので、いつも複雑な気持ちで大会を運営しておりました。今年の風船バレーボール大会が新たな第一歩となり、次年度の大会がより多くの施設の参加のもとに一層盛り上がることを心より願います。

ところで、風船バレーボール大会は今年で何回目の大会だったのでしょうか。開会式の挨拶でも「毎年、この時季に開催します云々」とあやふやな表現をしたのですが、大会がどのような経緯で、いつから開催されるようになったのかについて調べてみようかと考えている今日この頃です。



試合結果

- 優勝 ● るりけい寮 A
- 準優勝 ● 美山育成苑
- 第3位 ● 城陽作業所





施設長：奈良 匡



天ヶ瀬ワークスあすなろは、社会福祉法人不動園の2番目の施設として、宇治市の天ヶ瀬ダム近くの山あいに昭和60年4月に開設しました。当初は30名の利用者数でしたが増員と増築を繰り返し平成4年に現在の60名の定員になりました。また、開設当初は、天ヶ瀬学園という名称でしたが、平成25年に現在の天ヶ瀬ワークスあすなろに変わりました。

事業は、就労継続A型・B型・生活介護を行っており、作業内容としては、清掃、自動車部品組立、ガス警報器の分解、紙袋加工、ネジの箱詰、クッキー・マドレーヌの製菓、空缶・ペットボトルの分別、農耕があります。利用者が楽しく能力を発揮できるようにしています。また、集団や作業になかなか入れない利用者のための生活支援班があり、絵画、クッキング、自動車部品の箱入れ、近隣公園への散歩、音楽療法やPT指導によ

る運動を取り入れた支援を行っています。

利用者が「今日も、天ヶ瀬楽しかった。明日も行くわ」「今日は、何するの」と毎日笑顔が溢れ、生き生きと生活できる支援を目指しています。保護者のみなさんや支援学校の先生と相談し、利用者にとってよりよい支援とは何かと試行錯誤を繰り返し、また会議を通して職員が情報を共有し、利用者一人ひとりにマッチした支援が行える施設でありたいと考えています。

利用者は、宇治市だけでなく、京都市左京区、伏見区、山科区や久御山町、城陽市からもご利用いただいています。山あいにありますので、自然が多く、昼休み等はグラウンドで散歩やランニング、野球等のスポーツを楽しまれています。ただ、自然が多いので猪や鹿がおり、夜のうちに畑や花壇を荒らしていることもしばしば…



(対策はしているのですが…)。

法人内には、他に知的障害者の入所施設(ショートステイを含む)・保育所・高齢者施設・身体障害者施設があり、福祉のトータルサービスを目指しています。法人理念である「共感と信頼」のもと、作業やレクリエーション等を通じて、利用者、保護者、地域の方々と法人職員が日々共感し合い信頼関係を築けるよう、また、それぞれの利用者が仲間とともにいられる場所、一緒に歩んで行ける場所、成長できる場所でありたいと願い支援に取り組んでいます。



シリーズこんにちは

広報部員施設訪問記

社会福祉法人 幸の会 かんご 神座ホーム
共同生活援助事業

訪問者：岩田 稔 (京都市大原野の杜)



10月12日、気持ちのいい秋晴れの日、社会福祉法人幸の会の共同生活援助事業所として運営されている神座ホームを訪問させていただきました。

当日は中川みどり施設長とホームで生活されている松本さんにお話を伺わせていただきました。

神座ホームは平成13年12月に京都市左京区静海市原町に市原ホームとして立ち上げられ、活動を開始されていました。市原ホームは入居されている方が日中に通所している生活介護・就労継続支援B型施設「七彩の風」への距離が近いという利点があったのですが、ホーム周辺に飲食店や買い物をするお店が少ないという立地条件などがありました。そのため平成16年1月に市原ホームを閉所されて、上賀茂にある神座荘(2F建て)の1Fへと施設を移転する事で神座ホーム(定員6名)として新たにスタートされています。さらに同年4月に同建物2Fで山本ホーム(定員5名)を開所されており、平成26年8月には介護サービス包括型共同生活援助事業として指定されています。

神座ホーム・山本ホームは最年少18歳から最高齢68歳までの幅広い年齢の9名の方々が入居されています。平日は各階1

名ずつの世話人と生活支援員(1・2階を一体的に支援される職員)1名の計

3名で、6:30〜9:00、16:00〜21:00の時間で入居者の生活支援を行っており、

宿直は「七彩の風」職員2名が担当して、週2日22:00〜翌7:00に行っています。

世話人をされているスタッフさんは午前には朝食の準備や共有スペースの掃除や洗濯等の生活支援を行い、夕方からは入居されている方との買い物や夕食の準備、お風呂の見守り、洗濯等の支援をしています。

土日祝日は基本的には世話人や生活支援員はおらず(土曜の夕方だけお風呂の見守りを行っています)、各入居者それぞれに自室で休日をご過ごされ、食事も外食やお弁当等を購入して楽しんでおられています。

世話人をされている方にお話を伺うと、「入居されている方は外に出る機会も多く、身綺麗に生活することが大切で、それには日々接している職員の心構えが試されますね」と仰られていました。両ホームは世話人と生活支援員が役割分担をしっかりと連携を取



ることで入居されている方々にとってより良い支援を目指しておられ、それがお話を伺わせていただいていた時の松本さんの笑顔に繋がっているのだなと感じました。今回取材という形で訪問させていただきましたが、中川施設長のお話や現場の世話人の方々のお話はまだまだ経験の浅い私自身の勉強ともなりました。皆さまにはお忙しい中取材に協力いただいた上に、親切丁寧な対応をしていただきました。ありがとうございました。



新規加入施設紹介

NPO法人タイム・ワークサポートセンター タイム・ワークサポートセンター



管理者：福田 吉純
京都市右京区嵯峨天龍寺北造路町5-3

- 施設種別：就労移行支援事業
就労継続支援B型事業

タイム・ワークサポートセンターは、京都の観光名所のひとつである嵐山(JR嵯峨嵐山駅から徒歩5分)で、就労移行支援事業と就労継続支援B型事業を行う多機能事業所です。

利用者一人ひとりの働いて輝くをサポートしていくため、パンの製造販売をする「マルシェ」とパスタランチを提供する「Doppo(ドッポ)」の2店舗内での仕事や菓子の袋詰めの仕事を通して、個々の利用者の就労への意識や意欲を高めています。



Doppo

また、企業での実習も積極的に行う中で、具体的な就労へのイメージをつかみ、高めつつ、関係機関と連携し、就労につなげています。

さらに、就職された後も、当事業所との関係を大切にもらい、「さくら会」というOB会を月1回定期に実施し、働き続ける(定着支援)ためのサポートも継続して行っています。

●[タイム・ワークサポートセンターとは、どんなところ?]

レース場の「ピット(給油・整備所)」のようなところであり、疲れて職場をリタイヤした人が少し休憩したり、人間関係に困難を感じた人がリセットして、再チャレンジするための鋭気を養う所です。もちろん、今まで一度も社会に出たことがない人が巣立つための「助走路」でもありたいと考えます。

ゆるりねっこわーく株式会社 生活介護事業所ゆるり

管理者：土居 一輝
京都府木津川市木津南後背217-7木津川プレイス 101号室

- 施設種別：生活介護

「ごゆるりとお過ごしいただきたい」という気持ちで毎日の支援を行っています。お仕事という位置づけでゆるりを利用して下さっている方の気持ちも大切にしながら、出来るだけ無理強いしないで活動していただくために、現在のところは納期のある活動は取り入れておりません。貼り絵、クレヨン画、水彩画、さをり織りなど創作活動、散歩、公園、買い物、ラジオ体操など体を動かすこと、お一人で買い物があったという夢に向けてお金の計算や買い物の練習も行っています。最近は歌を歌うことがブームになっています。以前のブームは折り紙でした。さをり織りも、初めて織りに触れられる方も、縦糸の色を選ぶところからすべてご自分でしていただけて出来るようになっていきます。様々な表現方法で、気持ちを伝えて頂けてうれしく思っています。うまく言葉で表現できない方につきましても、表情や視線の変化などで、その日にされたい活動はなんだろう?と一緒に探しております。時には喧嘩もありますが、体だけではなく心の安定を目標に、ゆったりとした空間を提供したいと考えております。



編集後記

今年もあと少しとなり「早いなぁ」が利用者さんとの口癖になっている私です。

いきなりですが、皆さんは座右の銘をお持ちですか？

私は座右の銘として『感謝』『一期一会』を掲げています。私がこの二つを大切に過ごしていきたいと強く感じるようになったのは地元を離れてからでした。

高校卒業後、京都に出てきた私は、それまで限られた環境の中にいたので、京都で見るもの全てが新鮮で、何より数え切れない人との出逢いがありました。

大学時代、就職して今現在、出逢った人の中には、関係が長く続いている人もいればその場限りの人ももちろんいます。私はたとえ一瞬でも出逢いには全て意味があると思うも

特定非営利活動法人HEROES デイセンターHEROES

活動風景▼

管理者：松尾 浩久
京都市上京区元誓願寺通西堀川上る
聖門前町414西陣産業会館

- 施設種別：生活介護
- ビールを醸造・販売(予定)



現在、HEROESでは地ビールの醸造・販売を目指して準備をおこなっています。自閉症の方への就労支援の一環として、障害者雇用、作業の創出を目的としています。プロジェクト名は「西陣麦酒計画(にしじんばくしゅけいかく)」です。2年前から準備を進め2017年初夏にビールの醸造・販売が実施できるよう準備を進めています。

●HEROESって?

HEROESという名称には、ひとりひとりが、その人の人生の主人公という思いが込められています。HEROESに関わる全ての方が、その人らしい人生が送れるように寄り添い共に歩み地域社会での多様な生活の実現を目指しています。

また、HEROESでは地域性と必要性を大切にしています。まず、地域性として希望者への送迎・緊急時の訪問が実施できるよう事業実施エリアを京都市上京区と中京区と極めて限定的にしています。次に、必要性として地域の支援ニーズ、①自閉症の方への支援、②行動上支援の難しさのある方への支援、③福祉施策を利用できていない在宅・引きこもりの方への支援の3点に力をいれています。

<http://www.762npj.jp/> (HEROESホームページ)
<http://nishijin-beer.com/> (西陣麦酒計画ホームページ)

広報部会より

KC ニュース第198号にて、広報部会の担当副会長を中西昌哉副会長(ベテスダの家)とご紹介していましたが、正しくは矢野隆弘副会長(かしのき)でした。訂正してお詫びいたします。



です。友人とは楽しさや嬉しさだけでなく、悔しさや悲しさを共有したり、一緒に何かを頑張ったり、困った時には助けられ・・・日々、その存在に感謝の気持ちでいっぱいになります。些細な事ですが、通りすがりの人と挨拶を交わす、道端で落し物を拾ってもらったなどのどこにでもありそうな出逢いでも、そこから人の温かさを感じたり、助けられる事で助ける事を学んだり。人から頂いた言葉で嬉しかったり悲しくなったり、救われた経験から人に寄り添い考えることの大切さや言葉の重みを再確認したり。

何だかまとまりの無い文章になってしまいましたが、今の私がいるのはこの世に送り出してくれた両親と出逢ったくれた方々のおかげで、人との出逢いは財産だなぁと、人出逢いに感謝。

(大照学園 綾木法子)